# オリガ・モリソヴナの反語法

米原万里

# オリガ・モリソヴナの反語法

米原万里

集英社

江苏学院图书馆藏书章

**米原万里**（よねはら　まり）

1950年、東京都生まれ、59〜64年、プラハのソビエト学校で学ぶ。東京外国語大学ロシア語学科卒業、東京大学大学院露語露文学修士課程修了。80年から同時通訳を始め、ソ連・ロシア関係の報道に従事。90年エリツィン来日時には随行通訳を務め、92年日本女性放送者懇談会SJ賞を受賞。95年『不実な美女か貞淑な醜女か』で読売文学賞、97年『魔女の1ダース』で講談社エッセイ賞を受賞。2002年4月『嘘つきアーニャの真っ赤な真実』で第33回大宅壮一ノンフィクション賞受賞。


オリガ・モリソヴナの反語法（はんごほう）

二〇〇二年一〇月一〇日　第一刷発行
二〇〇三年　四　月二六日　第五刷発行

著者　米原万里（よねはらまり）
発行者　谷山尚義
発行所　株式会社集英社
〒一〇一―八〇五〇　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話　編集部〇三―三二三〇―六一〇〇
販売部〇三―三二三〇―六三九三
制作部〇三―三二三〇―六〇八〇

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社石毛製本所
定価はカバーに表示してあります。



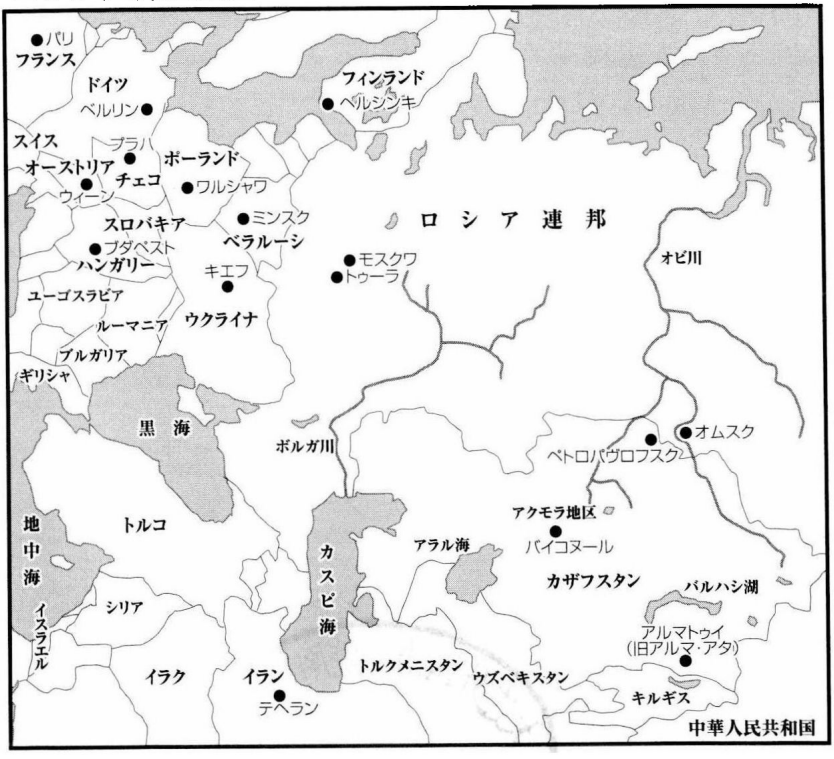
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。
本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
Printed in Japan

©2002 Mari Yonehara


ISBN4-08-774572-4　C0093

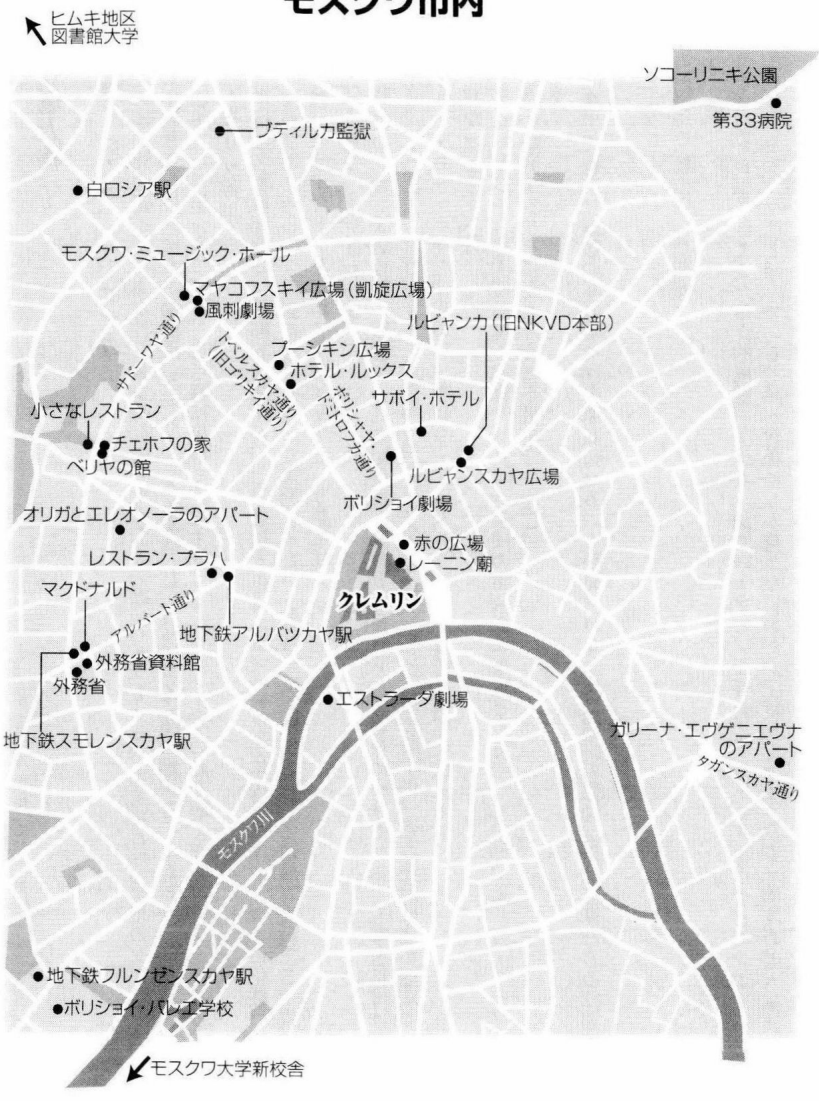
# オリガ・モリソヴナの反語法

## ロシア連邦と周辺




此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# モスクワ市内


ヒムキ地区
図書館大学
ソコーリニキ公園
第33病院
ブティルカ監獄
白ロシア駅
モスクワ・ミュージック・ホール
マヤコフスキイ広場（凱旋広場）
風刺劇場
ルビャンカ（旧NKVD本部）
サドーヴァヤ通り
トヴェルスカヤ通り
（旧ゴリキイ通り）
プーシキン広場
ホテル・ルックス
ボリショイ・ドミトロフカ通り
サボイ・ホテル
小さなレストラン
チェホフの家
ベリヤの館
ルビャンスカヤ広場
ボリショイ劇場
オリガとエレオノーラのアパート
赤の広場
レーニン廟
レストラン・プラハ
マクドナルド
アルバート通り
クレムリン
地下鉄アルバツカヤ駅
外務省資料館
外務省
エストラーダ劇場
地下鉄スモレンスカヤ駅
ガリーナ・エヴゲニエヴナのアパート
タガンスカヤ通り
モスクワ川
地下鉄フルンゼンスカヤ駅
ボリショイ・バレエ学校
モスクワ大学新校舎

## 主な登場人物

**弘世志摩　シーマ、シーマチカ**
東京在住の四二歳の離婚子持ち女性。少女時代の一九六〇～六四年、チェコスロバキアに在住、現地のソビエト大使館付属八年制普通学校へ通う。帰国後、ダンサーになる夢破れて、今はロシア語の翻訳をしながら食いつないでいる。ソ連邦が崩壊した翌年の九二年秋、長年胸に秘めてきたオリガとエレオノーラの謎を解くためロシアを訪れる。

**オリガ・モリソヴナ**
ソビエト学校の名物舞踊教師。自称五〇歳だが、七〇歳以上に見える。一九二〇年代風ファッションに化粧。しかし、踊りは飛び切り巧い。大袈裟に誉めることで罵倒するという独特の反語法を駆使して情熱的に教える。校内に怖いもの無しのはずだが、なぜかアルジェリアという語に怯える。

**エレオノーラ・ミハイロヴナ**
ソビエト学校のフランス語教師。銀髪で一九世紀貴婦人風の裾の長いドレスを身につけている。志摩を見付けると、「中国の方?」と何度でも尋ねてくる。古風で美しいフランス語、ロシア語を話すが、老人性痴呆症が進んでいる様子。オリガ・モリソヴナと仲がいい。やはり、アルジェリアという語に異常に怯える。

**ミハイロフスキー大佐**
在チェコスロバキア・ソ連大使館付き武官。ソビエト学校の学芸会に来賓としてやって来て、オリガ・モリソヴナとすれ違って転倒する。その三カ月後に心臓発作で死亡。

**カーチャ**
志摩の同級生で親友。無類の本好きで図書館員になるのを夢見ている。父は図画の教師、母は志摩たちの二年下級の担任。

**スヴェータ**
志摩の同級生。校内一の情報魔。

**ジーナ**
チェコの学校から転校してきた東洋的風貌の美少女。踊りの天才で、なぜかオリガ・モリソヴナとエレオノーラ・ミハイロヴナを「ママ」と呼んでいる。孫か曾孫にしか見えないのだが。ボリショイ・バレエ学校の編入試験に合

格してモスクワへ行ってしまう。

**レオニード**

志摩の一年上級の背の高い少年。志摩の初恋と失恋の相手。美しいがゾーッとするほど冷たいグリーンの瞳をしている。でもジーナにだけは優しい。

**コズイレフ**

旧ソ連を代表する哲学者。レオニードの父。陽気な気性、頑健な肉体の持ち主だが、プラハで急死。自殺ではないか、という噂が流れる。

**ナターシャ**

モスクワのエストラーダ劇場のダンサー。ソ連時代のオリガ・モリソヴナの謎を、志摩、カーチャとたどる。

**マリヤ・イワノヴナ**

エストラーダ劇場の衣裳係の老女。一九二八年から劇場で働き、オリガ・モリソヴナの謎解明に一役買う。

**ガリーナ・エヴゲニエヴナ**

一九三〇年代、ポーランド人と結婚し、スパイ容疑で銃殺された夫に連座して逮捕され、ラーゲリ（強制収容所）へ送られたロシア女性。後に収容所体験を綴った手記を書く。

**マリーナ・ルドネワ**

ボリショイ・バレエ学校の女生徒。

**ヤン・シャオツィー**

エレオノーラ・ミハイロヴナの夫だと思われる人。上海の大富豪の御曹司。中国共産党員でパリ留学。結婚後、モスクワのコミンテルンで活躍。

**バルカニヤ・ソロモノヴナ・グットマン（バラ）**

一九三〇年代、ディアナの芸名で活躍したモスクワ・ミュージック・ホール伝説の踊り子。チェコの外交官と恋に落ちて婚約するが、前夫のピアノ弾きに密告され、スパイ容疑で逮捕され銃殺される。

**マルティネク**

バルカニヤ・ソロモノヴナと婚約するチェコの外交官。

装画　N・V・パルホメンコ
装丁　スタジオ・ギブ

# オリガ・モリソヴナの反語法

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

# 1

「ああ神様！　これぞ神様が与えて下さった天分でなくてなんだろう。長生きはしてみるもんだ。こんな才能はじめてお目にかかるよ！　あたしゃ嬉しくて嬉しくて嬉しくて狂い死にしそうだね！」

オリガ・モリソヴナはチャルダシュを弾いていた指先の動きを止めると、両手を頭上に掲げて天を仰いだ。次にその手で頭を抱え、もうこれ以上こらえ切れないといったふうにこれ見よがしに身をよじって立ち上がるのだった。

「そこの驚くべき天才少年のことだよ！　まだその信じ難い才能にお気づきでないご様子だね。何をボーッと突っ立ってるんだい！　えっ!?」

吠えるように濁声を張り上げながらグランドピアノを離れ、ツカツカと講堂の舞台を横切って踊りの輪の中に割り込んでくる。文法の授業で反語法のことを習うよりはるか前から、子供たちはみな、先生が「天才」と言うのは「うすのろ」の意味なのだと知っていた。

群舞を乱したハリネズミのジョルジックは狼ににらまれたみたいにちぢこまった感じになった。図体がでかいポーランド人の男の子で、いがぐり頭の髪の毛がピンピンに突っ起っているものだから、そんなあだ名がついている。

「ぼっ、ぼくの考えでは……」
「ぼくの考えでは……だって。フン。七面鳥もね、考えはあったらしいんだ。でもね、結局スープの出汁になっちまったんだよ」
ピシャリと「天才少年」の言い訳を封じた先生は、鮮やかな緑色のフレアスカートを右手で軽くつまんで模範演技を見せ始めた。
「ほれ、両目をおっぴろげてちゃんと見るんだよ。ハンガリー・ダンスの場合はだね、何度も言っているように、右足はこんな風に弧を描くようにして前から後ろへ持っていく。それにしても、どうだいこの足、惚れ惚れするじゃあないか。五〇女の足に見えるかい」
右隣にいたカーチャが志摩の方を見て、「また始まったわね」というふうに、ニコッと目配せした。オリガ・モリソヴナは五年前も、いや一〇年前も自分の年を「五〇歳」といっていたらしい。そういう言い伝えがもっともらしく聞こえるほど、目の前の先生は七〇歳にも八〇歳にも見える。
薄緑色のブラウスを通して透けて見える先生の肩や腕には老人性のしみが浮き出ていたし、赤と緑と金色が絡まり合う派手なネックレスは顎のあたりの肉のたるみを目だたせていた。ネックレスとセットになった大ぶりのイヤリングがぶら下げられた両耳たぶの穴はビローンと縦に伸びきっていたし、何十年間も白粉を塗り込んできたらしい皮膚は毛穴が巨大化していて五メートル先からでも鼻の頭の黒いブツブツが見えた。染めたに違いないまばゆいばかりの金髪がライオンのたてがみのようだったこともあって、ただでさえ大きな口にベットリと塗り付けられた真っ赤な口紅は今そこで赤ん坊でも喰ってきたかのように猛々しかったし、口紅と同色のマニキュアを付けた長く伸ばした爪先からは血が滴り落ちてくるかのようである。
でも、でもである。スカートと同じ鮮緑色のハイヒール（先生がかかと九センチ以下の靴を履いた

のを見たことがない）を履いた先生の足は息をのむほど美しかった。太からず細からず、まさにほど良い肉付きのふくらはぎが滑らかな曲線を描いて足首のところでキュッと引き締まっている。

そしてよく見ると、非の打ちどころがないのは先生の足だけではなかった。三〇代半ばを過ぎると、あたかも必須の法則があるかのようにムクムクと肥え太りはじめる典型的スラブ女が多数を占める教師たちの中でオリガ・モリソヴナのスラリとした体形に太刀打ちできる人は、もちろん皆無。その理想的な姿形の肉体が繰り広げるしなやかで切れのよい身のこなし、それに何よりも踊る姿には、ついわれを忘れて見とれてしまう。

「あの恐ろしげな顔と濁声さえ無ければ、完璧な美女なのに……」

志摩が思わずつぶやいたら、カーチャがさかんに肯いた。

「うんうん、仮面舞踏会だったら、男はみんなオリガ・モリソヴナにイチコロだよね」

まだ一〇歳になったばかりで、自分と他人の容姿がむやみに気になりだした頃だった。志摩は、この学校に編入してきて以来、週二度のこのリトミカという名のダンスの授業が楽しみでならなかった。かならず何か劇的な展開が約束されていたのだもの、ワクワクするなと言う方が無理である。

弘世志摩がチェコスロバキアはプラハのソビエト大使館付属八年制普通学校に編入してきたのは、一九六〇年の一月二二日のことだから、まもなく一年になろうとしていた。なぜ日付までハッキリ覚えているのかというと、はじめて学校を訪れた朝、校長室に入っていくときに、付き添ってくれた父が、

「そうそう、レーニンが亡くなったのは、一九二四年一月二一日だった。きのうは没後三六周年だったのだね」とつぶやいたからだ。校長室の手前がかなり広いホールになっていて、そこにレーニンの胸像が据えられていた。右に赤旗、左にソ連国旗が掲げられていて、旗のポールに両方とも黒いリボ

ンが結ばれていたので、父は気づいたのだろう。

それにしてもオリガ・モリソヴナは、「思案のあげく結局スープの出汁になってしまった七面鳥」の戒めをよく口にする。おそらく、「下手な考え休むに似たり」に当たる諺なのだろうが、今まで引いたどの辞書にも教科書にも慣用句辞典にも載っていないし、他の先生方が口にするのも聞いたことがない。小説や詩の中に出てきたこともない。オリガ・モリソヴナ自家製の諺なのかもしれない。

父母参観日や学芸会に学校を訪れる大人たちが、オリガ・モリソヴナの姿を認めて度肝を抜かれる様子を見るのはおかしかった。例外なくまず誰もがわが目を疑い、次に狐につままれたみたいに思いっきり間抜けな表情になる。

何しろ服装がとびきり古風だった。一九二〇年代には、きっととても斬新で格好よかったにちがいないファッション。若き日のグレタ・ガルボやマレーネ・ディートリッヒを大げさにしたみたいな、と形容したら一番分かりやすいかも知れない。二〇世紀初頭には粋だったような帽子、顔面を覆うベール、付けボクロ、レースの手袋、大振りで大時代なアクセサリーという身なりの七〇歳をゆうに越えた老婦人が、強烈な香水の匂いをふりまきながら校内を傲然と闊歩する。おのずとその周辺だけ異質な風が吹いているような、非日常的な、しいていえば舞台のような空間がポッカリと出来上がる。

オールド・ファッション、それがいつの頃からか先生についたあだ名だった。

一一月七日の十月社会主義革命記念日を前にした学芸会に来賓として学校にやってきた太っちょの駐在武官の大佐など、階段のところでオリガ・モリソヴナといきなりすれ違ったため足を踏み外してひっくり返り転げ落ちてしまった。大慌てで駆け寄った案内役の校長と教頭に助けおこされながら、武官は見るからに怯えた様子でたずねたそうだ。

「あれは何だ？」

「オールド・ファッションのことをね、あのデブが、『あれは誰だ?』ではなく、『あれは何だ?』と尋ねたんですって」

スヴェータがマーマレード色の髪をなびかせて、学校の中を駆け巡り、その一部始終をふれまわったものだから、出来事は三〇分以内に校内の誰もが知るところとなった。

スヴェータ Света はスヴェトラーナ Светлана の愛称なのだけれど、ロシア語で光を意味するスヴェート свет の語末に a という母音を一字つけ加えた形になるので、日本語にすると、「ヒカリちゃん」というような語感を持っていた。だから、音の速度よりも光の速度の方が速いということを理科の時間に習い覚えて以来、おしゃべりなスヴェータの口にのって校内に瞬く間に噂の広まるさまを光速度にひっかけて、「スヴェータ（ヒカリちゃん）速度」と言うようになっていた。そして、そう言われるようになってからというもの、ますますスヴェータは張り切って、伝達速度もさらに速くなったみたいだ。

スヴェータは興奮すると、ふだんは目立たないソバカスが浮き立って、髪の毛と同じ色の粉を顔面いっぱいにまぶしたみたいになる。そして真っ青な瞳をキラキラさせて、どんなことでも、まるで今自分の目で見てきたかのように話す。今回もスヴェータから大佐転倒事件の一部始終を聞いた誰もが、自分も目撃者であるような錯覚を覚えた。武官の動転ぶりをものの見事に伝えていたし、真偽のほどは定かではなかったけれど、いかにもありそうな、それでいて絵になる話だったから。

志摩も、その光景を思い浮かべながらフフフと笑いがこみ上げてきて、そして何だかオリガ・モリソヴナのことがとても誇らしくなった。

どことなく陰気で演説がうんざりするほど長くてつまらない武官は、嫌われ者だった。大人のロシア人は敬意と親しみを込めて、名前と父称で呼ばれるのがふつうなのに、面と向かった場合は別だが、

三人称ではミハイロフスキーと苗字だけで呼び捨てにされていたことからして、いかに煙たがられていたかわかるというもの。許せないのは、大柄なすっごく胸の大きな美人の奥さんがいる（これもスヴェータ情報なのだが、このあいだ大使館のパーティーでその奥さんがジプシー・ダンスを踊ったときに肩をブルブルふるわせるたびに豊かな胸がブルンブルン飛び跳ねるものだから、男の人たちが喜んだのなんのって、ということだ）というのに、片っ端から綺麗な先生方に言い寄っていることだ。

「あの魚みたいな目でネットリと見つめられると、悪寒が走るわね」

陰では、女教師たちも嫌がっているようなのに、本人の前では、どう見ても愛嬌を振りまいているのだから大人は実に分かりにくい。

まあそんなわけで、これは一種の快挙だったのだ。オリガ・モリソヴナはますます女を上げた。

「先生の美貌がまぶしくて、このあいだ武官が階段から転げ落ちてしまったんですってね」

「あら、そんなことあったかしらん」

本人が、気にもとめない様子なのが、いよいよ頼もしい。

しばらくして、たしか転倒事件から三〜四カ月ほどして武官は狭心症の発作か何かで亡くなった。

「きっと、オリガ・モリソヴナと出会ったときのショックが響いたのよ」

というコメント付きで、この話もまたたくまにスヴェータ速度で広まったのだった。

「オリガ・モリソヴナには怖いもの無しだわね。無敵のオリガだね」

歴史の授業で習いたてのスペイン無敵艦隊のことを思い出して、ニュースを知らせてくれたスヴェータに志摩がそう応じると、ソバカスが浮き出てマーマレード色に染まった顔を近づけてきた。

「いやだ、シーマチカ、知らないの？『無敵』はイリーナの形容詞なんだよ」

シーマチカというのは、志摩のロシア語風愛称。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com